旅に出かけての発見

9/13/2015

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

岐阜で観光業をしている知り合いを訪ねて、一泊 2 日の「岐阜・美濃」の旅にでかけました。おりしも、台風来襲と重なりましたが、貸切タクシーと添乗員の臨機応変な対応で満足な旅をすることができました。今回の旅の狙いは何と言っても「鵜飼い」です。台風による長良川の増水のため、当初予定の「小瀬鵜飼」は断念し、「ぎふ長良川鵜飼」を楽しみました。

鵜の庵　（自宅での鵜）

【鵜飼い場で出逢った人】

鵜飼いは、鵜を使って魚を捕る伝統漁法で、長良川では 1300 年の歴史があり、岐阜市内に 6 名、関市内に 3 名の鵜匠がおります。彼らは、正式には宮内庁式部職鵜匠と言い、明治時代に宮内庁の御料場として保護され現在に至っており、年に 2 回は駐日大使を招いての鵜飼いがあるとのことです。今回は、そのひとり「山下純司」さんに「鵜の庵」で話を聞かせいただきました。

私が興味をもったことは、鵜匠(人)と鵜(鳥)の会話はどのように意思疎通されているものかということでした。自宅で、約 20 羽の鵜を飼育されており、餌やりから掃除、そして籠の中の状況などを毎日欠かさず見られており、「愛情を持って、辛抱強く付き合うことが大切」「鵜の目を見て会話をすること」だと話されていました。当年 76 歳の山下さんは、最近講演会でも話されることが多いようで、そのようなときには、タイトルや原稿はなく、会場の雰囲気そして客の顔を見て話されるとのことでした。

「鵜のこころ　鵜匠のこころ
今日語らい　明日又語らう　このえにし
鵜と鵜匠の一生なり」

これは、40 歳の時に読んだとのことですが、鵜匠として、鵜に向き合う気持ちがでています。

長良川鵜飼(かがり火の左下に鵜はいます)

今回は、長良川の上流にある「小瀬鵜飼」を楽しむ予定でしたが、小瀬(関市)では、3 名の鵜匠の一人足立陽一郎さんの自宅(旅館)で女将さんと話しをすることができました。手入れされた広い庭園と室内を案内していただき、気配りの行き届いた方で、お客様のもてなし方の見本を見せていただいたひと時でした。小瀬鵜飼の特徴は、暗闇の中の昔ながらの鵜飼いです。次回はその伝統を楽しみ、鮎づくしの料理を堪能してみたいものです。

【篠田桃紅　現代美術（関市役所　6F 美術空間】

103 歳の篠田桃紅氏。若きころから書道をたしなみ、ニューヨークに出かけたことで、作風は現代美術になったと言われています。偶然、その作品が何と岐阜県「関市」にありました。桃紅氏の作品は海外に多く、国内では「岐阜現代美術館」に殆ど収納されているようです。この美術館の

財団の出資元は、「鍋屋バイテック」という民間会社で、岐阜での伝統的な鋳物を発端に工具等のメーカーです。今回は、関市役所のコーナーで展示されています、約 20 点の作品を鑑賞してきました。下地は、美濃の和紙を使い、その上に「墨」で濃淡を表し、時には、色彩のある画材を用いており、立体感のある趣のある作風でした。私にとっては、作風の良さと同時に、書にその生き様を感じたひと時でした。

【郡上おどり、うだつがあがる町】

車を走らせ、郡上八幡まで 1 時間。何と言っても、「郡上おどり」は有名です。毎年 7 月から 9 月初めまでの開催で、ちょうど我々が訪れた時は最終日から一週間が経っていましたが、郡上博物館では 10 ある踊りの型を披露してもらい、一緒に踊りました。この踊りの特徴は、誰もが踊りの輪の中に入れることと、また盆の間の 4 日間は徹夜で踊ることです。是非一度は実際に踊ってみたいものです。

美濃市は、美濃和紙で有名で、私は「和紙」で作られた靴下を買い求め、早速はいてみたところサラサラ快適感があり大変よいものでした。

また、「うだつがあがる町」の象徴として、写真にもありますように、商家の隣との境につけてある防火壁を「うだつ」というのです。これは裕福な家にしかできないことから、うだつがあがるということらしいです。よく「うだつがあがらない」という言葉が使われますが、うだつを建てられない人が「うだつがあがらない」とバカにされるようになったことから由来しているようです。(但し諸説あり)

【刃物の町　関市】

我々には、「関の孫六」の包丁で有名ですが、関市内には約 100 の刃物の生産事業所があり、その中でも、刀を伝統工芸として作っている鍛冶屋もあり、若い人の育成が行われているようです。すでに日本では、刀は持ち運ぶことも容易ではありませんが、伝統工芸として海外にも国内にも人気があるそうです。ちなみに、本屋に寄ると専門書が 2 冊ありました。

鍛冶伝承館では、年に 7 回実際に刀匠による実演があるようです。

妻は、刃物館で実用的な「おろしがね」を買い求めてきました。

【　旅は･･･　】

旅は、知らない土地の雰囲気を、そこで知り合った土地の人との会話で感じあい、そして和むよい機会です。

また行きたい、訪れたいと思う土地の人との会話はいつもいいものです。

関市の伝承館にある「関東」と「関西」の分岐点。関より東は関東。西は関西ということとありました